

中学校英語における文構造と文法項目に関する 指導指針と実践上の課題 —句レベル・節レベルの理解から—

Agendas for Current English Language Teaching in Junior High School Classrooms
According to the Education Ministry's Guidelines on
Sentence Structures and Grammatical Items
—Based on Pre-service Teachers' Understanding of Phrase- and Clause-level Structures—

服部 吉彦¹⁾・加藤 コラゾン¹⁾・下内 充¹⁾

Yoshihiko HATTORI, Corazon KATO, and Mitsuru SHIMOUCHI

抄録：中学校英語で扱われる文構造と文法項目について、実際の英語の授業内でどのように利用し指導されているかを二つの事例で観察し考察する。コミュニケーションを成り立たせる発話の有意性を獲得する際に、授業内では教室という特定の場面が制約となる。また対話においてどのようなやり取りが可能で既習項目をどのように活用するかも限られた時間内で指導する教師に託された大きな課題である。将来の高校レベルの学習にも連携できる指導の指針として句レベル・節レベルの理解に重点を置き、結果としての文/発話の文法的な正確さに執着するのではなく柔軟性のある指導を目指したい。中学校での重点文法項目を指導者が英語の構造から適格に把握することは指導効率を高めるためだけでなく、生徒の将来の読解力にもつながるはずである。

キーワード：中学校の英語、文構造、文法項目

I はじめに

1. 学習時間と検定教科書内の学習項目

現在の中学校での英語の授業時数は、年間各学年140時間、3年間で計420時間（1単位時間は50分）である。年間35週で授業が行われることから、週4時間が英語の時間に割り当てられている。

外国語（英語）の学習を行う際に、教科用図書が活用されていることから、今回も、岐阜県で活用されている中学校の教科用図書を、特に「文、文構造及び文法事項」等に焦点をあてて調査をすることで、小学校で学習してきたことがどのように中学校と連続し、接続がされているのか、また、どのように指導をすることが、生徒たちの言語運用に効果をもたらすのかを考える。

2. 中学校外国語科の目標及び内容

『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』では、外国語科の目標として、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することとなっている。

また、「外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりを整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」としている。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせ、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」の言語活動を行うことが大切となる。

そのためには、

- ①外国語の背景にある歴史や文化の理解とその相手への配慮
 - ②コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に依じた考えの形成や再構築
 - ③適切な言語材料の活用
 - ④言語の役割の理解
 - ⑤伝え合うという双方向のコミュニケーションの重視
 - ⑥小学校での学習との接続への留意
- 等が重要な視点であると考えられる。

そして、学習指導要領解説には、上記の目標を基に、育成を目指す資質・能力の三つの柱に関わって、次のような目標が設定されている。

1) 教育学部子ども教育学科

「知識及び技能」

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。¹⁾

「思考力、判断力、表現力等」

- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。²⁾

「学びに向かう力、人間性等」

- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。³⁾

とある。⁴⁾

II 英語指導実践例

英語指導の実践例として中学校英語の実際について2つの事例を見てみたい。次節1では上記①③⑤⑥について扱い、続けて2において②③④⑤について考察する。

1. 対話による伝え合う力の向上を目指す授業(2年生)

1.1. 2023年10月に参観した授業内容

この授業での目標は、(3) 話すこと [やり取り] の「(イ) 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」に重点が置かれていた。⁵⁾

そして、(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項については、エ 話すこと [やり取り] 「(イ) 日常的な話題について、伝えようとする内容を整理し、自分で作成したメモなどを活用しながら相手と口頭で伝えあう活動」を行っていた。⁶⁾

授業者は、エ 話すこと [やり取り] 「(ア) の関心のある事柄について、相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして、互いに会話を継続する活動」の内容である「即興で伝え合うことができるようにする」とか「会話を継続・発展させること」⁷⁾に努めていた。使われていた語句や文は、“Oh, you said..., right? / Pardon? / I see. / Really? / How about you? / Why? / Anything else? / Some more.” などである。また、授業者はコミュニケーションを継続するポイントとして、“Repeat / Reaction / Question” という視点を生徒に示していた。

タスクとしては、「Let's tell (ALT) about my house rules!」(家の規則についてALTに話しましょう)と設

定されていた。これは、「ホームステイ先の家族にあるルール」について、教科用図書 (*New Horizon English Course 2* [以下 *NH-2*], Unit 4, Scene 2, p. 60) で学習した内容やその時に使われた助動詞 *must* を生徒自身の家族にあるルールと関連づけて組まれた活動である。⁸⁾

この授業での学習過程は次のようである。

- ① Listening time: ALT の家族ルールについて、授業者と ALT で対話をしながらモデルを示す。その際に、義務の意味を持つ *must* を使用する。また、教科用図書に使われている *come home, have dinner, have a plan* 等の動詞句や、*is safe in the evening, a little early* 等の形容詞句や副詞句を活用する。

- ② Small talk と使用された語句や文の確認：Listening Time で話された内容や使われた語句や文を板書して確認する。

板書文：They must come home by 6.

They must not go out alone at night.

They must have dinner together.

これをもとに、T-P (teacher to pupil) 対話を行う。

- ③ 課題の提示とメモの作成：本時のタスク「Let's tell (ALT) about my house rules.」を示し、ALT に紹介するためにペアで練習をする目的を示す。
- ④ Pair activity I：各自でキーワードにあたる語句や語句、文をメモした後、ペア間で説明をする。
- ⑤ Sharing Time：さらによくするための疑問やよい表現を交流する。
- ⑥ Pair activity II：再度ペアで、語句や表現内容を工夫しながら伝え合う活動をする。
- ⑦ ALT の先生に、各自の家のルールを紹介し、ALT との間でやり取りを行う。
- ⑧ Writing Time：説明した英文を簡条書きで書きまとめ、ふりかえりを行う

このような学習過程をふみながら、メモを参考に、必要な語句や文を用いて即興的に対話をし、言語活動を多く経験して内容を理解したり、表現したりして、伝え合う力の向上を図った授業であったととらえた。

1.2. 生徒たちの活動状況と学習過程

生徒たちがメモを取る際の取り方は、関連図にしたり、キーワードを書いたり、いわゆる思考するためのスキルが身についていた。また、子どもたちは、④や⑥での活動では、板書に書かれた *must* を使った英文や教科用図書で使われていた動詞句など、使用できるものを活用して、対話を進めていた。⑤では、授業者が、「Do you have any questions?」と問うと、「もっと他にないかを知りたいのですが」という質問に対して、授業者からは、「Anything else?」、ALT からは、「Some more?」はどうか、などのアドバイスがでた。また、授業者から、「What rules do you have?」と問い返している子どもがいることも示され、板書をするなどして、内容を「つなげていく、

深めていく」という本時のねらいに即した例が出されていた。そして、“I see. / I come home by 6.”、“By 6?”、“Really?”など「話しかける、相づちを打つ、聞き直す、繰り返す」といったコミュニケーションを円滑にする言語の働きや“Thank you. See you.”など、お礼や次への機会への期待など気持ちを伝える言語の働きをする言葉がスムーズにでてきていた。こういった身近な暮らしの中で言語運用を図る場面が設定され、参考になる語句、文、内容が示される機会が豊富にあることが、英語を学び続ける生徒たちのモチベーションの維持につながっていると感じた。

そして、このことは、中学校1年生での毎時間の言語活動はもとより小学校での言語活動などで培われてきたことが定着していることであると考えている。

この授業における、「目標」は(3)話すこと[やり取り]の「イ 日常的話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」である。この話すこと「やり取り」については、小学校外国語活動の目標では、(3)話すこと「やり取り」「イ、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする」⁹⁾となっている。後半の部分で小学校において「語句や基本的な表現」が中学校では「語句や文」となっていることについては、「小学校での学習やこれまでの経験の中で触れてきた語彙や表現を含め、中学校で扱う語句や文を用いることである」¹⁰⁾と述べられている。中学校での学習においては、小学校で、どのような文や文構造で表現を学んでいるのかを意識することが言語活動を仕組むにあたって大切なことだと考えられる。

言語材料については、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説(外国語編)では、「英語の特徴やきまりに関する事項」として、「音声」、「符号」、「語、連語及び慣用表現」及び「文、文構造及び文法事項」に整理されている。そして、「言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する」としている。これは、「意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し触れることができるよう様々な言語活動を工夫し、言語の運用能力を高めること」¹¹⁾が必要となっているためである。

1.3. 文、文構造及び文法事項

[知識及び技能](1)英語の特徴やきまりに関する事項 エ 文、文構造及び文法事項では、「意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること」¹²⁾とある。

小学校の外国語科においては、「文及び文構造」となっている。基本的な表現として、代名詞、動名詞、過去形などを含む文を指導するのであるが、取り出して指導は

していないということである。つまり、I like playing baseball. という表現を動名詞の使い方を理解し活用してきているわけではないということであり、文法の用語や用法の指導を行うのではなく、日本語と英語の語順の違い等の気づきを促すようにし、基本的な表現として聞いたり話したりして、活用するということである。そのため、「文型」ではなく「文構造」という用語を用いている。小中学校では文型という型によって分類するような指導をするのではなく、文の構造自体に目を向けさせることが意図されているのである。

今回の中学校の授業において生徒たちが活用している文構造は、小学校でも一部扱われてきている[主語+動詞+補語]、[主語+動詞+目的語]が主であった。文法事項は、「c 助動詞 must」が取り上げられている。小学校では、助動詞 can が「能力」を表す場面で使われてきた。中学校では、「許可」や「依頼」も加わる。本時の must は「義務」として使われている。授業者は、その用法が授業の中で、理解が促進され、活用できるように、意味のある文脈となるように、場面を設定して取り上げた。

授業者は、They must come home by 6.

They must not go out alone at night.

They must have dinner together.

と並列に板書して[must+動詞]を生徒たちに気付かせ位置付けていた。また、言語活動を通して繰り返し触れて活用できるように、

A: What do you want to be?

B: I want to be an English teacher.

A: What must you do?

B: I must study English harder for my future.

といったように対話形式での言語運用を行う活動を仕組み、ALTと授業者がモデルを示し、生徒たちにT-P対話を行った。その後、生徒たちは、それらを参考にしてP-P(pupil to pupil)でのsmall talkを行った。その際も、例文を板書して、子どもたちが参考にできるように環境を整えたり、分らない語句については、助言をしたりした。

参観した中学校2年生の生徒たちは、小学校において、1年生から6年生まで、英語活動及び英語の授業を受けてきている。低学年は、年間10時間、中学年は年間35時間、高学年は年間70時間であり、1単位時間は45分である。小学校では、「自分のことや身近で簡単な事柄について、伝え合う言語活動を行うことを通して、特に、聞くこと・話すことに慣れ親しんできた」子たちである。P-Pによるsmall talkは、自ら、伝え合おうとする態度がにじみ出ている。また、“want to ~”を使った文構造の表現は、小学校5年生で、“What do you want to study(教科)? I want to study(教科). What do you want to be? I want to be a(職業).”の表現を活用して自分の考えを述べる活動を経験しており、さらに、小学校

6年生では、“What school event do you want to enjoy? I want to enjoy sports day. What club do you want to join? I want to join the (volleyball) team. I want to be a (volleyball) player.”などの楽しみたい行事や中学校で入りたい部活動、将来なりたい職業などに関して対話したりスピーチ活動を行ったりしてきていることを踏まえた中学校での言語活動である。このことは、表現の定着だけでなく、活用場面や状況を広げていきコミュニケーションを豊かにしていると考えられ、小中学校の学びの接続や連続性の重要性が垣間見える場面であるととらえた。

2. 説明する場面に応じた双方向重視の授業（2年生）

ここでは、前掲②③④⑤について、2021年11月に参観した授業から考えてみる。

この題材は、「誰もが使いやすい暮らしやすい社会をつくるには」というテーマで、Universal Design について考えるように教科用図書はつくられている（NH-2, Unit 5, pp. 71-80）。従って、教科用図書で示されている universal design facilities を知ったり、universal design products の特徴を理解したりしたのち、「自分たちが生活や学習をする場である学校の中にある身近なものやことについて、もっと使いやすくするにはどう考えるか自分の考えやアイデアを伝え合う」言語活動が設定されていた。

中学校学習指導要領解説外国語編では、〔知識及び技能〕(1) 英語の特徴やきまりに関する事項では、「音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの個別の知識は、どれだけ身についたかに主眼を置くのではなく、…それらを理解し、「実際に英語を用いた言語活動」において活用し、主体的に運用する技能が習熟・熟達に向かったり、後述の思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識が獲得され、学習内容の理解が深まり、学習に対する意欲が高まったりするなど、三つの資質・能力が相互に関係し合いながら育成される必要がある¹¹⁾とあり、実際の授業では、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるような活動を仕組む必要があるということである。

ここで扱われる文構造は、「主語＋動詞＋関節目的語＋how（など）to不定詞」と「主語＋be動詞＋形容詞＋thatで始まる節」「主語＋動詞＋thatで始まる節」である。教科用図書には、“I can show you how to use these universal design products. I can also tell you where to find universal design facilities in our city.”の文が対話例などの中で示されている。また、“I’m glad that I could find other examples in our city. I think these ideas are wonderful. I’m sure that they help many people.”の文例がユニバーサルデザインについて調べたことを発表する場面で示されている。

参観した授業は、前述したが「自分たちが生活や学習をする場である学校の中にある身近なものやことについて、もっと使いやすくするにはどう考えるか自分の考えやアイデアを伝え合う」言語活動を、“What universal design do we need? Why? Let’s talk.”というタスクを設定して授業が行われていた。従って、この授業では、「主語＋be動詞＋形容詞＋thatで始まる節」「主語＋動詞＋thatで始まる節」という文構造を、言語活動を通して子どもが活用できるようにすることが重要となる。

また、ここでの(3)言語活動及び言語の働きに関する事項でのオ 話すこと〔発表〕は、「(ウ)社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、自分で作成したメモなどを活用しながら口頭で要約したり、自分の考えや気持ちなどを話したりする活動¹²⁾」である。また、言語の働きでは、「話し掛ける、相づちを打つ、聞き直す、繰り返すなど」コミュニケーションを円滑にする表現が活用されていると会話が続けられていくこととなる。

この授業の学習過程は以下のようである。

- ① ユニバーサルデザインについて、この単元で生徒たちが考えてきた good points (Everyone can use it. It is useful and helpful.) と内容の確認をする。
- ② 教科用図書で示された、“Plastic bottle. Ramp. Handrail.”について、関連図を作成しながら、good points のキーワード、たとえば、special shape. hold it easily.などを板書して説明し、授業者がモデルを示す。
- ③ 生徒各自が授業者のモデルや教科用図書の文章を参考にして関連図を作成した後、ペアで伝え合う活動を行う。
- ④ 交流の時間を持ち、代表の生徒に説明をさせ、I think ～.の表現を意識させる。
- ⑤ 自分の中学校のユニバーサルデザインについて、さらに暮らしやすくするためのアイデアなどの説明するときの、流れや必要事項の確認をする。This is ～. Features. Reasons. I think～.
- ⑥ 関連図を作成した後、メモを見ながら、ペアで伝え合う活動を行う。
- ⑦ 交流の時間を持ち、良い表現方法や内容の工夫を行い、再度ペアで伝え合う活動を行う。
- ⑧ 自分の説明した内容を再構築しながら、書きまとめ、ふりかえりを行う。

④での交流の際の、代表生徒の説明¹³⁾は、“This is [a] handrail. This is the brail on the handrail. It is for blind people. When they walk, it is easy to go.”であった。この説明に対して、

授業者：What do you think?

生徒：It’s useful.

授業者：You think it is useful?

生徒：Yes. I think it is useful.

のように T-P 対話をしながら、授業者は、I think～. でまとめていくように生徒に意識をさせた。生徒の中には、教科用図書の発表で示されている文を参考にして “I’m sure that it help[s] many people.” とまとめている生徒もいた。

⑦での代表生徒の発表から、生徒たちは、自分も使うとよいと思ったことを出し合った。たとえば、should や if など相手を説得できるような具体的な内容や考えがあるとよいことや、so などつなぎの言葉を使って説明をしていくとわかりやすくなることなどが確認された。また、授業者からペア活動の中には、“I see. That’s a good idea. Nice. Once more, please. Oh, it has a special shape…” などコミュニケーションを円滑にする表現が使われたり、発言者の表現や内容に対して適切に応答したりする表現が使われていることに言及があり認め励ましが行われた。この学習過程では、教科用図書で使われている語句を取り入れたり、節を使ったりすると自分の説明に説得力がでるなど、その表現のよさを生徒が感じた授業であったととらえた。

授業者は、生徒に身に付けさせたい文構造の言語の使用場面を考え、発表ややり取りの構成、表現方法や内容に留意し、具体的な文例を示しながら、言語活動を積み重ねて、生徒の考えたり感じたりしたことを適切に表現することができるように授業を構成しているととらえることができた。

Ⅲ 句レベルと節レベルについて

上記で観察した「文、文構造及び文法事項」(3. 1. 2) に関してさらにこの項目全体の内容と指導項目の確認、補足を以下に簡潔にまとめておきたい。

1.1 前置詞句

句レベルでは小学校から慣れている構造に前置詞句がある。この構造は形容詞または副詞として機能する、という点を理解すれば日本語の「名詞+助詞」構造と同じであるため、それほど難しく感じないように思われる。前節の活動では問題にはなっていないが、日本語にする場合は、日本語の形容詞句を作る助詞は「の」しかないため、この「～の」の部分動詞（の連体形）で補足的に表現するなどの工夫があるのは前回の補語の場合と同じである。¹⁵⁾ 形容詞修飾としての句では、a sport like basketball「バスケットボールのようなスポーツ」(NH I-43) のようにそのまま自然な表現となるものもあるが、大部分は the bench under the tree「木の下ベンチ」→「木の下にあるベンチ」(NH I-49) のように動詞の助けが要するという点を明示的に指導しても日英語の対照という点では効果があると思われる。構造的に重要な点は前置詞が目的語をとる（支配する）という連結上の規則がある（後述）。

1.2 動詞句の扱い方

動詞を中心として動詞句構造という場合には、次の2つの意味合いがある。従来の文型を決定する動詞の型、すなわち目的語、補語をという文の要素を含めた構造と、動詞が定型化した（すなわち、人称、数、時制、法性の定まった）形の動詞を中心とした構造（SVOC の V の部分）である。（V の部分には、進行形、完了形などの複合形態となる場合も含める。）

1.2.1 文と動詞句の関係

口頭で言われた表現（発話）も、意味上まとまった内容があれば、文という扱いになるのは、省略された全要素を（意識的に）補い、完全な構造を決定することができるからである。

学校文法において文は、前節の前者の定形動詞とさらに文の要素を中心にもつ構造を節と定義して、その形態の一部でも意味的にまとまりがあれば文として扱う。（例えば、Where have you been? に対して、単に、The post office. と答える場合、I have been to the post office. の一部であるとしても、文として扱う。¹⁶⁾）さらに、その文中の動詞に関しては、それぞれ目的語、補語、修飾語のうち何が求められるかを語彙的要素として言語使用者は経験的に知っているとされる。¹⁷⁾ したがって、文の型を決定するのは実は動詞の型であると言える。正確には節構造が構成され、それが実際に言語として表に出る場合に、口頭では発話、文章中では文となる。節ひとつで作られる文が単文、複数節を持つ文が、重文または複文とされる。（ただし、中学校段階では厳密に区別して使用しない。「重文には文が重なっている」と説明される場合もある。正確には、「重文は節が重なってできている」である。）

1.2.2 動詞型と5文型

前述のように学習指導要領では「文型」と言わずに「文構造」と言及する利点は、ひとつには結果としての文を型にはめることによる構成主要素に偏る見方を避けて、他の修飾句やその配置にも注意を向けるといった点が挙げられる。それよりも動詞の型を（動詞の原形のまま）句レベルとして認識しそれが定形動詞化したときに文を構成すると考える方が、この動詞自体が不定詞、動名詞、分詞を構成するときの構造把握にも、また、文または節の構造と同じように目的語、補語、修飾語を認識するためにも有用である。すなわち、必須要素を「とる」関係（支配関係）をつくる5型を句レベルで捉える¹⁸⁾と次のようになる（「ゼロ」は目的語も補語もとらないことを示す）。

- 動詞 + ゼロ
- 動詞 + 補語
- 動詞 + 目的語
- 動詞 + 目的語 + 目的語
- 動詞 + 目的語 + 補語

これらの句の動詞が定形化する（節/文を構成する）

ときに5つの文構造ができる。中学校では、このうちあとの2つの構造が準動詞として句をつくる例は少ないとしても、今後の高校レベルでの学習のためにはなくてはならない認識である。例えば

This may be a good chance to make your dream come true.

のような、名詞(chance)にかかる不定詞句内に目的語と補語(不定詞句)を持つ動詞がくるような構造は少ない。

また、分詞(句)が目的語のあとの補語として使用される構造は中学校学習指導要領にはなく中学校では扱わない。被害の受身、経験受動態と言われるものは高校進学後の学習範囲となる。¹⁹⁾したがって、中学校での指導時には文の構造としてではなく動詞句の構造としてこの5型を指導すべきであり、高校との連携を踏まえても有効となる。

1.2.2 述部を構成する動詞句

もうひとつの動詞句として言及する構造は²⁰⁾動詞が進行形、受動形、完了形をつくる場合で、一般に動詞に助動詞が先行している場合も助動詞と動詞の部分をも動詞句として扱う。

I'm watching TV, but I can talk. (NH-I-79より)

ここにくる形は全部で24種類あるが、中学校では上記、分詞をとともう3形態(完了形、進行形、受動態)の組み合わせのうち(takeを例にすると)

完了形+受動態

have been + 過去分詞 (have been taken)

進行形+受動態

be being + 過去分詞 (be being taken)

は使用しないので

完了形+進行形

have been + 現在分詞 (have been taking)

のみ構成できれば十分ということになる。

1.3 節レベルの2形態

節レベルにも2種類を想定した方が表と裏という分類から分かりやすい場合もあるかと思われる。表面に出ている節構造(SV等)と動詞句内に潜在している節構造である。後者は、SV~という形態に書き換えられるという点を準動詞(句)内に意識するということになる。

1.3.1 潜在する節構造

準動詞とされる構造において、基本5文型という表に出ている枠とは異なる「深層」構造を(生成文法でのように)意識することが教室での活動時には役に立つ場合がある。日本語を使わない(ニア)ネイティブの指導者(NSE)(母語話者に近く英語を使える、という点では日本人も含まれるが、ここでは日本語の干渉を考慮して除外)においても同じで、動詞の語彙構造として内部にその必須要素(目的語、補語、ある種の修飾語など)を使用者は知っていると考え、動詞にはすでに「文」が

内在していると考えられる。

不定詞句でこの構造を見てみるなら

She can run fast. NH I-5

では、助動詞を介して she run(s) の関係は主語(S) + 述語動詞(V) と読みやすい。

I [am going to] visit Singapore next week. NH 2-9
の場合も be going to をひとつに教えるなら(助動詞扱いするなら)SVは明瞭である。

I [want to] join the dance team. NH I-5

の文では日本語の訳語「～したい」の感覚が一部のNSEのように(助動詞のような感覚で)残るとSVの把握は容易である。²¹⁾しかしここからは

I want [(me) to join the dance team].

という形で、行為を目的語としてとる構造(ブラケット内)を次の構造の伏線として準備するなら

I want [everyone to know this fact]. NH 3-38

のような文への移行は意味構造の把握には便利な場合もある。ただしこの構造は第5文型(SVOC)の文として出てくるため、[everyone to know this fact]の中にある潜在的文の認識は得にくい。それは文としては Everyone knows this fact. で実現するからである。実は動詞が主語をもつという意識は、英語の場合強くなり、中学校では動名詞は単独の例(I like painting. NH I-5)のみで使用例を見ないが、例えば

Is it easy for you to get up early? NH 3-39

のように、for を使って発話として出てくる構造も必要とされる。

前章(3.2)にあった how to do ~ の構造ものちには

People seem friendly, but they don't show how they really feel. NH 3-103

という節構造での理解も求められる。

1.3.2 名詞節、副詞節

一般的に副詞節においてはSV~とSV~の間に従属接続詞が入る例示が多いが、時間と学習者の理解力に余裕があれば中学校段階で

動詞 従属接続詞 SV~

という意識をもたせると、この動詞が(定形動詞となり文を作るだけでなく)準動詞として使用される場合にも対応できる。

名詞節としての

I think (that) it is useful.

I'm sure that it helps many people.

などの文では、後者の名詞節にはそれをとる他動詞、前置詞がなく、言わば、宙に浮いている名詞節となるが、前章(3.2)で見たように前者の類推が働き、学習者は sure の構造でも、think のあとの目的語を受ける「と」を読み、「～と確信する」と理解することができ、現場では構造的な意味把握に困難はない。

Ⅳ まとめと今後の課題

1. 文を構成するための4つの連結方法

日本語の名詞につく助詞は英語の前置詞句の構造と並行性があるため、日本人には、主語（「～が」）はともかく「～を」や「～に」を「かかる関係」と捉えようとする感覚がある。英語は準動詞に関して述べたように、主語・述語意識はかなり強いと考えるべきで、この連結の仕掛けは重要視するべきである。同じように前置詞と他動詞がもつ目的語を引く力も強く、これと補語の連結には前置詞が不要であることから分かるように、同じぐらい強いと考えると、追加的要素である修飾部分が「かかる/つく」という感覚とは異質のものと認識される。これに同格関係という日本語にない連結法を加えると、語レベル・句レベル・節レベルの認識とともに、英語の構造を把握するために有用である。特に中学生のような理性的な捉え方のできる時期には強調しても良いと考える。

すなわち英語をつなぐ仕掛けは

- 1 主語・述語関係（SV 関係）
- 2 支配関係（OC をとる関係）
- 3 修飾関係（名詞、動詞等にかかる関係）
- 4 同格関係（名詞などに並置してその補足説明をする関係）

を区別してそれぞれの要素を結びつけると考えると、日本語のように3のみで文をつくる構成とは違う意識も育つのではないかと思われる。

2. 中学校で扱わない文法項目

不定詞句、分詞（句）、動名詞（句）などの意味構造については大部分学習用教材が整っていると考えられるので詳細に述べなかったが、中学校では扱わないとされる分詞構文（分詞の副詞的用法）は新聞、雑誌には頻用されるので、時間に余裕がある場合には補足として解説があってもいいと考えている。²¹⁾

3. 文化と社会との関係

また文脈は、当然コミュニケーションには大きくかわり、言語そのもののもつ意味が、比喩（メタファー）的な転移、換喩（メトニミー）的な転移が関与する場合もあり、ここには文化・社会が関与する。この点は機会を改めて、近時英語教育では主流となっている国際英語論という観点²²⁾も含めて考察したい。

注：

1. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』（平成29年7月）、p.12。
2. 同上、p.13。
3. 同上、p.14。
4. 以上「中学校英語における定型表現と指導上の効率

に関する試論（1）」p.69より。

5. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』（平成29年7月）、p.23。
6. 同上、p.62。
7. 同上、p.61。
8. 教室での感覚では‘my house rules’と生徒に歩み寄った表現となっているが、正しくは、Let’s tell ~ sensei [the ALT’s name] about *your* house rules! である。活動としては、誤解はないのでこのままの形で進められた。なお、この「指示」を表す Let’s do ~. が自分を含めない行為を指示するときは「相手を見下すような感じを伴う」（『ジーニアス英和辞典』第6版）ので、教室以外などでは Please do ~. と言う必要がある。
9. 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』（平成29年7月）、p.79。
10. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』（平成29年7月）同上、p.22。
11. 同上、p.29。
12. 同上、p.36。
13. 同上、p.65。
14. ブラケット内は引用者の補足。
15. 加藤ほか「中学校英語における定型表現と指導上の効率に関する試論（1）」、pp.72-73。
16. 文は「文法の基本的な単位（unit）のひとつ」であるが「その多面的な性質のため、包括的定義は困難である」と考えられている（『現代言語学辞典』内の sentence の項）。ここでは論理主義的な定義を採ったと考えられる、「1語またはいくつかの語から成り、1つのまとまった判断・感情・意欲を表す発話の単位」を文と考えたい（安藤『基礎と完成新英文法』p.26）。
17. どの動詞も項（argument）をもつとされ、例えば「投げる」であれば、「誰かが何かを投げる」という語彙構造が言語使用者の頭にあり、この「誰か」「何か」を項として、この場合は2項動詞、「入れる」のようにもう1項[どこかに]が意識される場合は3項動詞とする。したがって「文型を決定するのは、動詞の項構造（argument structure）である」（安藤『現代英文法講義』p.16）。
18. 必須要素を要求する関係は、上記項構造でも見たように、修飾語（「かかる」関係）にもある。例えば、安藤『現代英文法講義』（pp.16-26）では、基本文型を8種類としているが、本論に挙がっている要素の他に、義務的な副詞語句を修飾として必要とする構文を加える場合である。
19. 例えば、安藤『基礎と完成 新英文法』には I had my watch stolen. 私は時計を盗まれた。 I had my shoes shined. くつをみがいてもらった。 He had his plan made. 彼は計画をたててまっていた。

のような文例が挙げられている。それぞれ、「被害」、「使役」、「結果」の用法とされている (pp.166-167 及び p.393)。

20. 例えば安藤『基礎と完成 新英文法』、p.122。
21. この感覚は高校レベルで be to do ~ という構造に助動詞扱いする用法 (be to = will, can など) を読みとるためには意味がある。
22. *New Horizon English Course 3* では、分詞構文は「資料編」の中の名作鑑賞 (The Letter) の中で使用されている (pp.120-122) が、脚注においてそれぞれの分詞句に対して和訳を入れてある。
23. 塩澤正ほか『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』(くろしお出版、2016) など。

謝辞：

各務原市立中央中学校の教諭、渡久地政務氏には前任教の授業を含めて授業参観の機会をいただきかつ、そこでの活動を本論に入れることを承諾されました。ここに感謝の意を表します。また匿名の2名の査読者の方々にも前回同様、有益な助言をいただきました。お礼申し上げます。

参考・引用文献：

- 安藤貞雄 現代英文法講義, 開拓社, 2005
安藤貞雄 基礎と完成 新英文法, 開拓社, 2021
加藤コラゾンほか 中学校英語における定型表現と指導上の効率に関する試論 (1) 一語レベルと句レベルの認識について一, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要, 24, 69-75, 2023
田中春美 (編集主幹) 現代言語学辞典, 成美堂, 1988
文部科学省 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編 (平成29年7月), 開隆堂, 2018
文部科学省 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編 (平成29年7月), 開隆堂, 2018

参照教科書：

- 笠島準一ほか *New Horizon English Course 1 ~ 3*, 東京書籍, 2021

Agendas for Current English Language Teaching in Junior High School Classrooms
According to the Education Ministry's Guidelines on
Sentence Structures and Grammatical Items
—Based on Pre-service Teachers' Understanding of Phrase- and Clause-level Structures—

Yoshihiko HATTORI, Corazon KATO, and Mitsuru SHIMOUCHI

Abstract : In junior high school English classrooms, Japanese teachers are supposed to adhere to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) guidelines in conducting communication tasks based on the grammatical items previously taught to students. We observe the implementation of these guidelines in two English classes comprising of second-year students. The sentence structures to be used in a certain classroom are limited, and the teachers must introduce new grammatical item (s) and vocabulary without giving explicit explanations most of the time. The future teachers of junior high school English should be used to the confines of the available language materials for the three-year curriculums. The grammatical structures needed in a particular context are constructed from phrase-level elements into appropriate sentence structures, which will roughly fall on the basic five patterns. These sentence patterns result from applying one of the verb types, and part of the structures with a high informative value will appear in the speakers' utterances. On the surface, utterances tend to have the forms of phrase-level expressions taken from potential complete sentence structures, which are the results of each communication situation. Teachers should understand that deep-level sentence structures require a solid grasp of phrasal elements, and speakers must generate contextually effective phrases or sentences. We recommend that pre-service teachers prioritize understanding these composing elements before focusing on achieving communicative results. We do not go deep into participle phrases as sentence complements and participle constructions, which are not included in the grammatical items of the MEXT guidelines.

Keywords : English in Junior high school, sentence structures, grammatical items in the MEXT guidelines